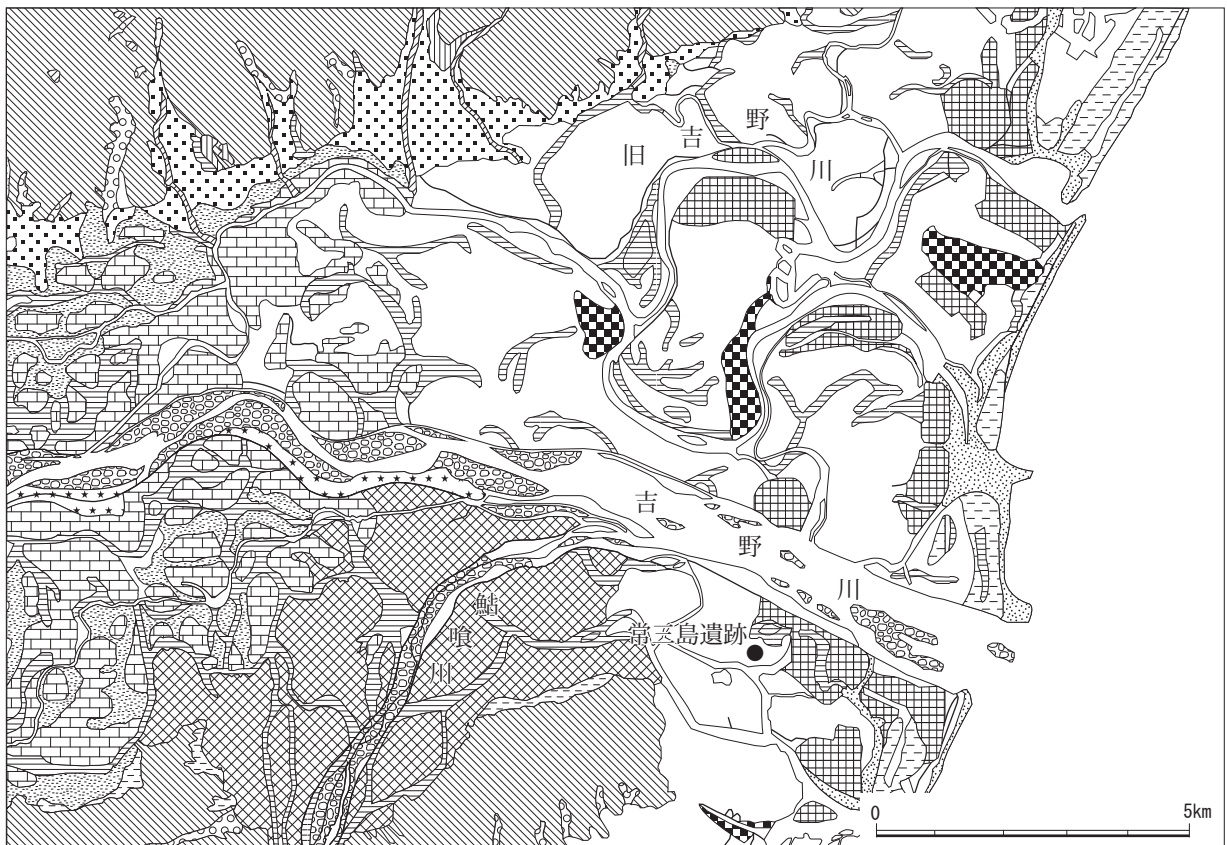


第1章 歴史的・地理的環境

第1節 遺跡の位置と歴史的環境

常三島遺跡は、徳島大学常三島キャンパス（徳島市南常三島町1丁目・2丁目）および総合グラウンド（徳島市北常三島町3丁目）に所在する近世城下町跡である。現在、常三島キャンパスの範囲は、徳島県遺跡地図（徳島県教育委員会 2006）では、「徳島城下町跡南常三島町1丁目地点」あるいは「南常三島町2丁目地点」という遺跡名で、周知の埋蔵文化財包蔵地として掲載されている。しかし、本調査室ではこれまで、研究・教育・社会貢献の様々な場で、この範囲に所在する遺跡を「常三島遺跡」と独自に呼称してきた経緯があり、その利便性も勘案して、本書でもこれを用いたい。

この遺跡は、四国最大の河川、「四国三郎」吉野川の河口付近のデルタ地帯に位置する（第1・2図）。高知県瓶ヶ森山南方を水源とする吉野川は、四国山地から中央構造線に沿って、紀伊水道に向けて東



急斜面	扇状地的自然堤防	地すべりによって形成された緩斜面 (山腹緩斜面を含む)	自然堤防	旧河道	河原・海浜
山麓緩斜面	谷底平野	干拓地	干潟	段丘	後背湿地
埋立地	堤防	扇状地	デルタ	砂州	氾濫原

第1図 吉野川下流域の地形分類図

大矢（1993）よりトレース・改変。



第2図 常三島遺跡の位置

1. 常三島遺跡 2. 新蔵遺跡 ⑭は常三島遺跡第14次調査地点
国際航業株式会社調製『徳島市全図2』をもとに作成。

流する。今日の市街地は、吉野川によって形成された沖積平野である徳島平野を中心に広く展開している。

現在の常三島キャンパスにあたる地点は、文書・絵図などの資料によって、近世に阿波徳島藩が中州の一部を埋め立て、中・下級武士の屋敷地とした場所であったことが明らかとなっている。明治時代になると、この地一帯は、江戸時代の街路区画が残されたまま、急速に水田化した後、徳島県尋常師範学校附属小学校や徳島大学工学部の前身である徳島高等工業学校が設置された。その後、太平洋戦争を経て、戦後まもなくしてから常三島キャンパスが設置され、今日に至っている。

常三島遺跡の周辺では、徳島城が築かれた城山（湊山）山麓に、縄文時代後期から晩期に属する城山貝塚が存在する。ここからは弥生土器も出土したとされるが、それ以外に常三島遺跡の付近で、弥生時代、それに続く古墳時代の遺跡は現在でも確認されていない。吉野川河口付近には阿波国の条里があり、奈良時代の8世紀中頃には、東大寺領阿波国新島荘が置かれていた。この新島荘には3地区があり、そのうちの枚方地区が常三島遺跡の北西に位置する現在の北田宮・上助任町付近に比定されている。その後、新島荘は10世紀頃まで確実に存続していたことが文献記録に残されている。鎌倉時代に入った1203（建仁3）年、南助任保と津田島を寄進された大和春日神社が、荘園化のため立券荘号を申請し、翌年に富田荘が正式に成立したという記録が残されている。その後、豊臣秀吉の四国平定によって、1585（天正13）年、蜂須賀家政が阿波国に入部し、城下町建設に着手することとなった。

蜂須賀氏は入部当初、長宗我部氏の旧城である一宮城を居城としていたが、すぐに徳島城に移転した。この理由として、次の三つが考えられる。一つ目は、陸上交通の要衝にあたる点である。阿波の

中でも徳島城が所在する「徳島」は、吉野川南岸を東西に走る伊予街道、海岸線に沿って南北に延びる土佐街道、淡路街道、讃岐街道の起点となっていた。二つ目は、海上防備、海上交通において有利な点である。徳島は、眉山から紀伊水道を見渡せ、かつ網の目のように広がる吉野川の支流が紀伊水道にそのまま流れ込み、また吉野川上流域への水運も開けている。三つ目は、河川を城郭の防備に利用可能な点である。徳島は、吉野川の分流に囲まれた自然の要塞とみることができる。洪水のたびに河成地となる徳島に、城下町を建設できた理由の一つとして、近世初頭の寒冷化に伴う海退現象によって、吉野川河口付近の三角州が発達したことをあげる意見もある（平井 1995）。

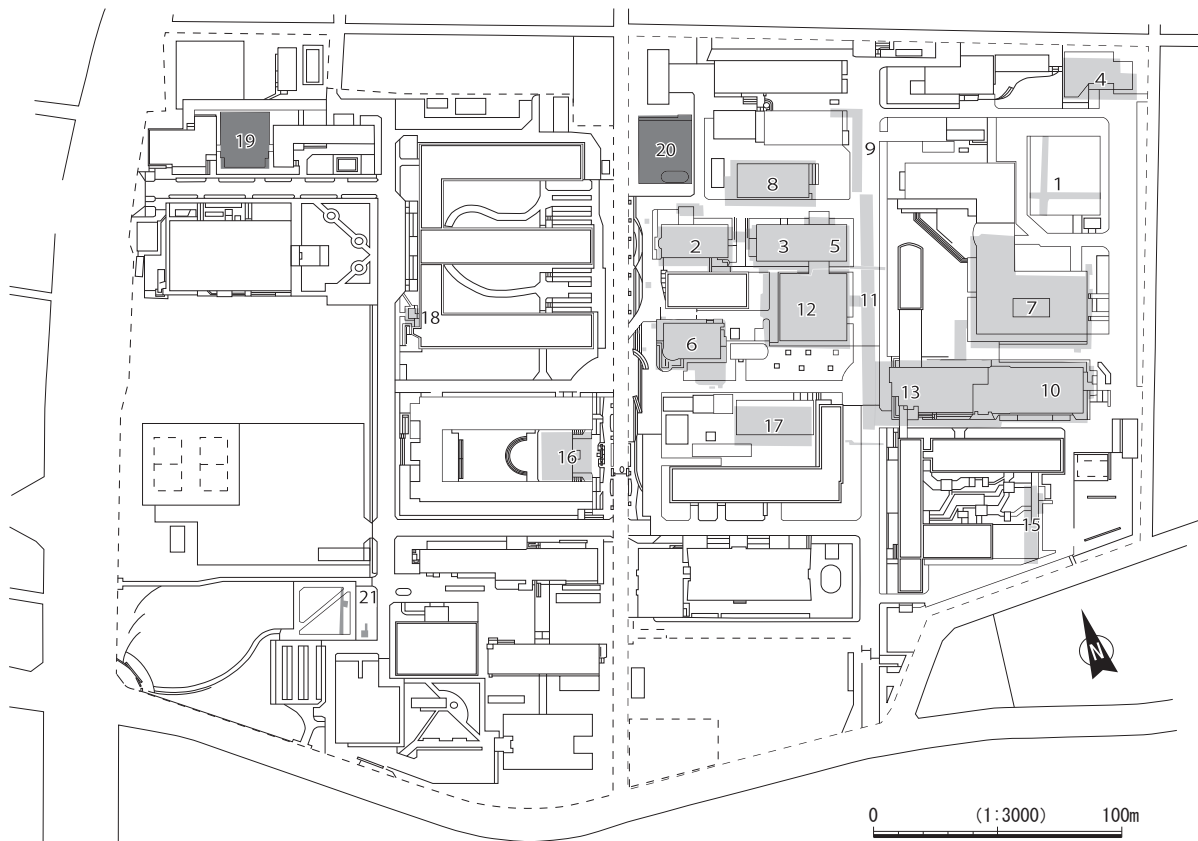
徳島城下町は、城郭の置かれた徳島をはじめとする出来島、寺島、福島、常三島、住吉島の6島と、それらの周りに配置された新町地区、富田地区、佐古地区、前川・助任地区からなる。6島は、吉野川分流の網状河川によって形成されたものであり、そこに「島普請」によって、武家屋敷や役所などが建設された。徳島には、家老・中老・物頭といった上級武士が、それ以外の島には主として中・下級武士が居住した。本学の新蔵キャンパスは徳島に、常三島キャンパスは常三島に所在し、それぞれに存在した武家屋敷は、屋敷主の階級を異にしている。島の周りに配置された地区には、足軽や町人が居住した。

これまで徳島城および城下町跡は、徳島県教育委員会、徳島市教育委員会、徳島県埋蔵文化財センター、そして本調査室によって調査されてきた。これらの調査は、城内と徳島地区、常三島地区を中心に行われ、当時の土地利用の実態解明に貢献してきた。しかし、富田、新町、佐古などの町屋、寺社地区の調査はほぼ行われていないのが現状である。

第2節 常三島遺跡の概要

常三島遺跡では、再開発を原因として、2016年度までに計21次にわたる発掘調査が実施されてきた。結果として、近世徳島城下町常三島地区の様相が、少しずつ明らかにされつつある。常三島キャンパスは、キャンパス中央を南北に走る道路を境として、西エリア（南常三島町1丁目）と東エリア（南常三島町2丁目）に分けられるが、発掘調査は東エリアで17次、西エリアで3次にわたって実施されている。また、キャンパスの北東に位置する総合グラウンドでは、1次の調査が実施されている。本書で報告する地域連携プラザ地点調査は、西エリアで3回目の調査であり、常三島遺跡としては、第19次調査にあたる。そして、フロンティア研究センター地点調査は、東エリアでは17回目の調査であり、常三島遺跡としては、第20次調査にあたる（第3図・第1表）。

これまでの調査では、江戸時代（17～19世紀代）の武家屋敷跡が検出されている。それより前の時期に属する遺構は今のところ、確認されていない。注目すべき成果としては、屋敷境の溝（1・3・4・6・7・9・11・16・17次）、素掘り舟入状遺構（15次）、石組み舟入状遺構（15次）、呪的な性格を有する青銅製品埋納遺構（2次）といった遺構の発見があげられる。また今日、徳島城下町遺跡を代表する遺物に数えられるしめなわ文茶碗の発見の契機となったのも、本遺跡の発掘調査（2次）である。同調査地点からは、投網用錘の鋳型も出土しており、これについての考察も試みられている。最近では、屋敷地内で検出された火葬墓（3・5次）についての検討もされている。以下、それぞれの調査



- | | | |
|----------------------------|-----------------------|-------------------------|
| 1. 工学部実習棟試掘 | 8. 総合情報処理センター | 16. 総合科学部3号館 |
| 2. 地域共同研究センター | 9. 共同溝 | 17. 工学部建設(総合研究)棟 |
| 3. 光応用工学科棟 | 10. 共通講義棟I | 18. 総合科学部1号館エレベーター |
| 4. 工業会館 | 11. 共同溝II | 19. 地域連携プラザ |
| 5. 光応用工学科棟(追加) | 12. 総合研究実験棟 | 20. フロンティア研究センター |
| 6. サテライト・ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー | 13. 総合教育研究棟(共同講義棟II期) | 21. 地域創生・国際交流センター試掘 |
| 7. 機械工学科棟 | 15. 工学部実験研究棟 | *番号は調査回数も兼ねる。 |

第3図 常三島遺跡の発掘調査地点

成果とそれに関連する議論について、詳述する。

屋敷境をめぐる議論 常三島遺跡での屋敷境の認識は、第1次調査(工学部実習棟地点)を嚆矢とする。この調査で初めて、調査地で検出された2条の溝が、絵図に示された屋敷地間の境界に該当することが確かめられた(北條・定森編2006)(第4図)。その後の調査でも検出例が相次ぎ、その成果をもとに、考古学研究者の橋本達也と文献史学研究者の石尾和仁との間で論争が行われた。橋本は、第3次調査(工学部光応用工学科棟地点)での成果をふまえ、常三島地区の屋敷境の基本構造を、中央に土手があり、その両側に溝が掘られるものとみた。そして、18世紀後半における溝の掘削(大型化、二条構造化)を、水害に対する排水効果を考慮しつつも、「所有権の明確化、屋敷地の再編・統制を行う」ためのものと考えた(橋本1998)。いっぽう石尾は、こうした溝の掘削を、新川掘り抜き(吉野川直流化)に起因とする洪水に対する排水効果を目的とするものとみて、橋本の見解を批判した(石尾1999a)。これに対し、橋本は溝の掘削の主たる目的は「所有権の明確化と公共事業として土木事業を行う」ことと再度主張したが(橋本1999)、石尾は藩主によって下賜された「拝領屋敷」に「所

第1表 常三島遺跡発掘調査一覧

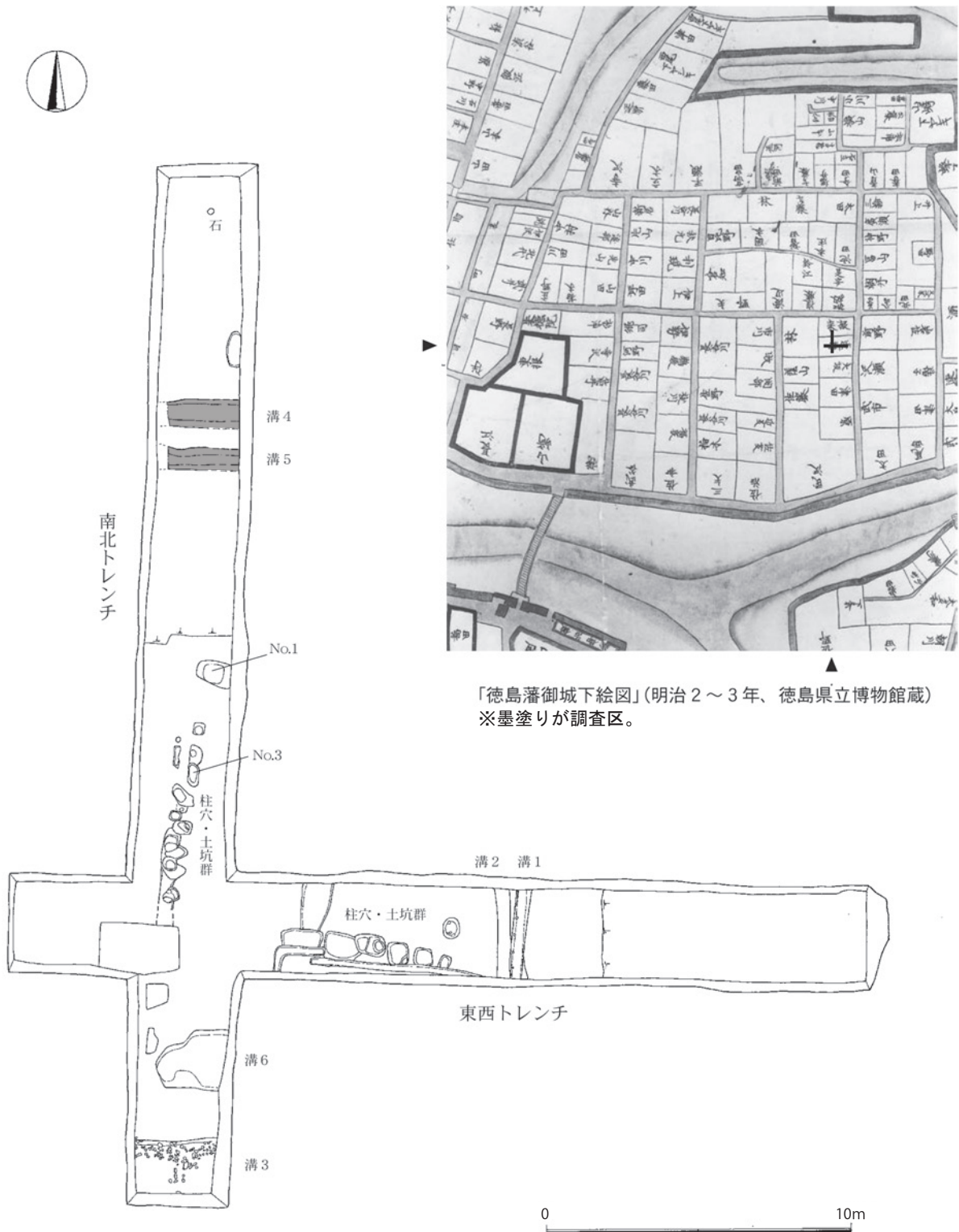
調査名	調査実施年 (年度)	調査地点	調査面積 (m ²)	調査期間	調査主体	担当者 (○は調査主任)
第1次調査	1992年 (平成4年度)	工学部実習棟	160	9月10日～9月20日 (11日間)	徳島大学	東 潮 ○北條芳隆
第2次調査	1993年 (平成5年度)	地域共同研究センター	373	10月1日～10月30日 (1か月)	徳島大学	東 潮 ○北條芳隆
第3次調査	1995年 (平成7年度)	光応用工学科棟	783	8月22日～3月25日 (7か月)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也
第4次調査	1995年 (平成7年度)	工業会館	400	12月1日～1月31日 (2か月)	徳島市教委	勝浦康守
第5次調査	1996年 (平成7年度)	光応用工学科棟-追加	165	4月17日～5月30日 (1か月半)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也
第6次調査	1996年 (平成7年度)	サテライト・ベンチャー・ ビジネス・ラボラトリー	619	6月6日～8月10日 (2か月)	徳島大学	東 潮 ○橋本達也
第7次調査	1997年 (平成8年度)	機械工学科棟	1,800	7月24日～11月8日 (3か月半)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也 中村 豊
第8次調査	1997年 (平成9年度)	総合情報処理センター	687	3月28日～6月10日 (2か月半)	徳島大学	北條芳隆
第9次調査	1998年 (平成9年度)	共同溝	178	7月22日～9月4日 (1か月半)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊
第10次調査	1999年 (平成10年度)	共通講義棟 I	900	5月10日～6月7日 (1か月)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊
第11次調査	1999年 (平成10年度)	共同溝Ⅱ-4	200	6月28日～8月11日 (1か月半)	徳島大学	○北條芳隆 橋本達也 中村 豊
		共同溝Ⅱ-1 共同溝Ⅱ-2	171 300	7月15日～5月26日 (10か月)	徳島大学	北條芳隆 ○橋本達也
第12次調査	2000年 (平成11年度)	総合研究実験棟	1,000	7月24日～11月27日 (4か月)	徳島大学	北條芳隆
第13次調査	2001年 (平成12年度)	総合教育研究棟 (共通講義棟Ⅱ期)	1,110.6	3月15日～6月8日 (3か月)	徳島大学	北條芳隆 ○中村 豊
第14次調査	2002年 (平成13年度)	総合グラウンド管理舎 器具庫の配水管	100	2月21日～3月1日 (2週間)	徳島大学	北條芳隆
第15次調査	2002年 (平成14年度)	工学部電気電子棟	253	5月20日～8月5日 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊
第16次調査	2002年 (平成14年度)	総合科学部3号館	532	7月29日～10月31日 (3か月)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊
第17次調査	2003年 (平成15年度)	工学部建設(総合研究)棟	381	4月28日～7月17日 (2か月半)	徳島大学	○定森秀夫 中村 豊
第18次調査	2007年 (平成19年度)	総合科学部1号館エレベーター	35	1月16日～1月21日 (6日間)	徳島大学	中原 計
第19次調査	2013年 (平成25年度)	地域連携プラザ	458	6月6日～7月1日 (1か月)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治
第20次調査	2013年 (平成25年度)	フロンティア研究センター	756	6月27日～9月11日 (2か月半)	徳島大学	○端野晋平 遠部 慎 山口雄治
第21次調査	2014年 (平成26年度)	地域創生・国際交流センター	40	5月28日～6月2日(4日間)	徳島大学	○端野晋平 三阪一徳

有権」という論理自体が成立しえないとして、これを退けた(石尾 1999b)。

徳島地区に位置する旧動物園跡地点の調査を行った勝浦康守は、調査の結果をふまえ、石尾・橋本が主張するような屋敷境溝の機能を、城下町全体での普遍的なものとして語ることはできないとした。そして、同地点で検出された、2条の溝に挟まれた「緩衝帯」を、屋敷間を通る「路地」とみなした(勝浦 2000)。

その後、橋本達也は、総合グラウンドの北西部に所在する土手を紹介し、これを絵図に描かれた常三島地区北東部の外縁ラインに相当するものとみなした。そして、この土手に沿った溝と、土手の上部に植えられた松の存在を認め、土手・溝・松とがセット関係にあったことを指摘した。さらに、こうした現象が、常三島キャンパス内での調査で確認されていた屋敷境の構造と一致すると述べた(橋本 2001a)。

これに対し、北條芳隆は、橋本が城下町境界遺構と個別屋敷地の境界構造との共通性を説いた点を



「徳島藩御城下絵図」(明治2～3年、徳島県立博物館蔵)
 ※墨塗りが調査区。

第4図 工学部実習棟地点の屋敷境溝 (縮尺: 1/200)
 グレー塗りが屋敷境溝。北條・定森編 (2006) より引用・改変。

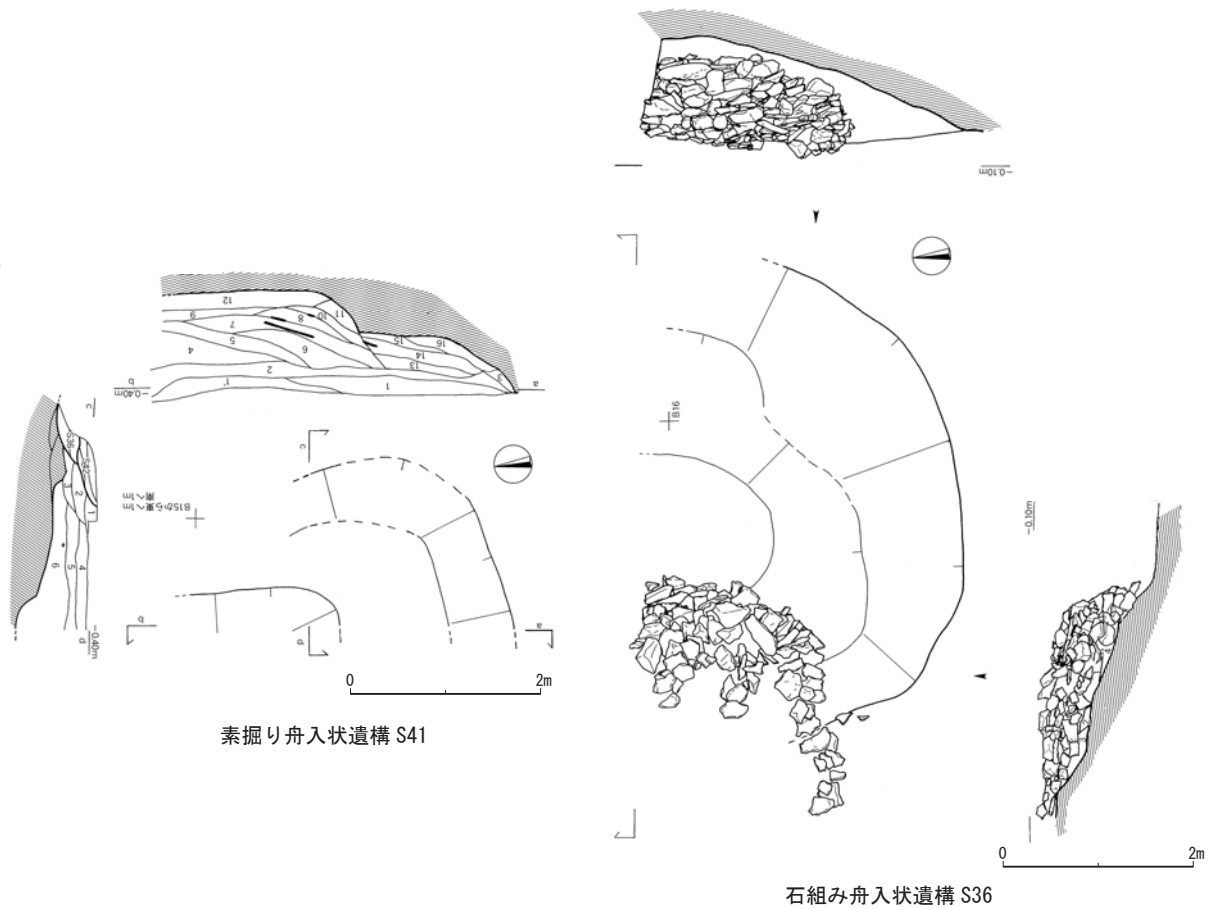
問題視した。そして、屋敷境遺構の調査所見を検討したうえで、屋敷境の基本構造は、2条の溝とそれに挟まれた掘り残し部分であり、掘り残し部分上に土手、さらに土手と松のセット関係を積極的に想定しうる証拠は得られていないと批判した。また、溝出土遺物の再検討結果をふまえ、それまで一律に18世紀後半ごろとみなされていた溝の大規模化・二条化の画期を、一部の地点においてはそれを認めつつも、おしなべてみた場合は、18世紀初頭から前半とみなすのが妥当であるとした。溝の機能については、石尾（1999a）と同じく排水用とみなし、大規模な溝の埋土中から竹の根株が多数発見されている事実から、溝とともに竹垣が屋敷境の基本構造として重要であると説いた（北條芳隆2001）。

この竹垣の重要性は、北常三島町で聞き取り調査を行った橋本が、現在残された竹垣の存在を示したうえで、語っている。聞き取り調査の結果によれば、むかし（戦前）は、大水時に屋敷内部のものが外部へと流出するのを防ぐために竹垣が設けられていたという（橋本2001b）。

2006年には、第7回四国城下町研究会が「近世の屋敷境とその周辺」というテーマで開催され、その時点までの研究の総括が行われた。その中で、常三島地区を担当した北條芳隆は、それまでの研究で明らかとなった事実を整理している。以下、それを引用する。

- a) 常三島地区において、道路に面しない部分の屋敷境には2条の溝が掘られるという形態が基本である。道路に面した部分についてはなお検討を要する。
- b) 溝は17世紀代から幾度かの掘り返しを経て幕末期まで推移するというありようが基本である。すべての地点において当初から2条であったのかどうかはなお検討を要するが、18世紀代において開削され直す現象や、2条の溝が揃う地点は確かに目立つ。
- c) これらの溝が排水機能を有したことも動かない。
- d) 2条の溝に挟まれた間の「土手」状の掘り残し部分がおそらく境界である。この掘り残し部分は「緩衝帯」として把握され、路地として利用された可能性もあるが、どちらの屋敷にも属さない（なお普遍化はしえないが、この掘り残し部分に松の植栽があった事実もある）。
- e) 「土手」状の高まりは、両側を溝によって掘削された結果、見かけ上の「土手」として認識されるものであり、たとえば幅数mにも達する大規模な溝を掘削した後に、改めて中央部に土を盛り上げ直した「堤状の人為的構築物」などと解釈しうる余地はない。
- f) 各屋敷の外縁部には竹が生け垣として植栽される場合が多かったと判断される。竹が植栽される理由は、洪水や増水への対処策が本地区では切実な課題であったからである。
- g) 竹が植栽される背景に洪水対策が想定される以上、これと並行して2条の溝が掘削される理由としては、同様に洪水対策としての意味を想定するのがもっとも自然である。溝と竹の性格を切りはなして別立てで論じるべき根拠はない。

また北條は、常三島地区における治水対策の問題についても言及した。すなわち、18世紀における別宮川（現・吉野川）への流路変更とそれに伴う城下域への水量増加と、屋敷境溝や排水路、「調整池」の掘削との間の関連性について、今後、関連遺構の出現時期の同時性と広域性の点で検証する必要性を説いた。さらに、常三島武家屋敷を景観的側面からみて、あえて2条の溝とし、掘り残し部分を間に設けている点に、中世の居館との類似性を見出し、その背後に中世的ないし封建的屋敷観が

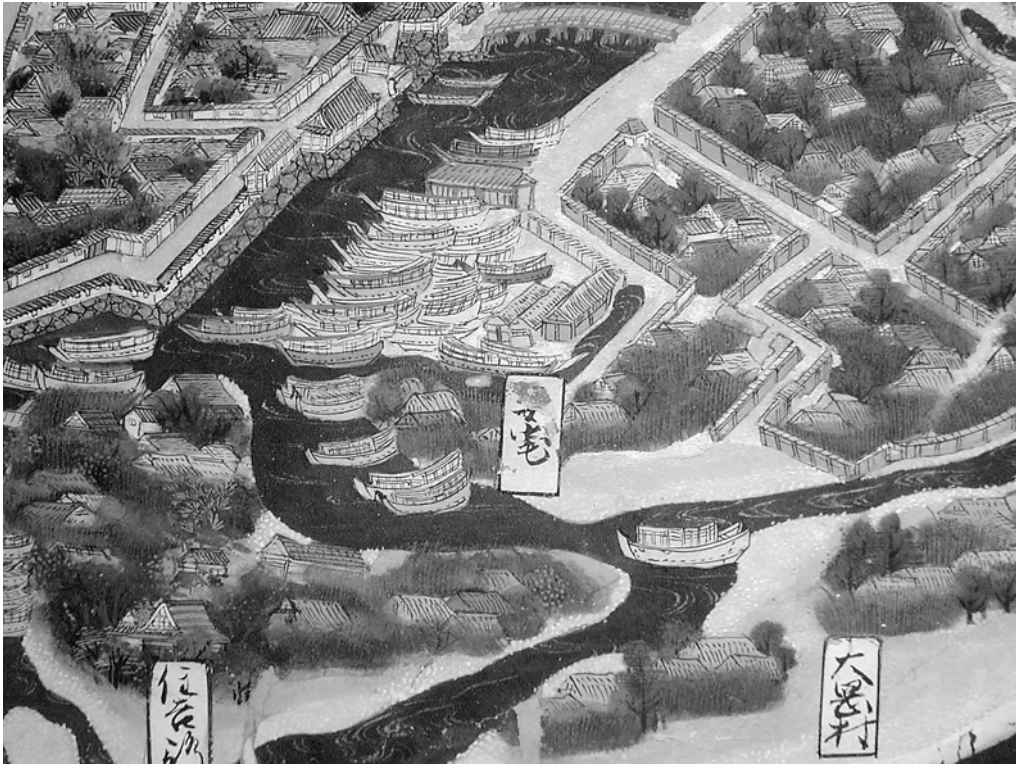


第5図 工学部電気電子棟地点の舟入状遺構（縮尺：1/80）
定森編（2005）より引用・改変。

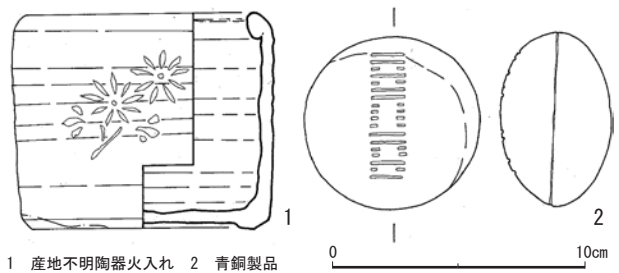
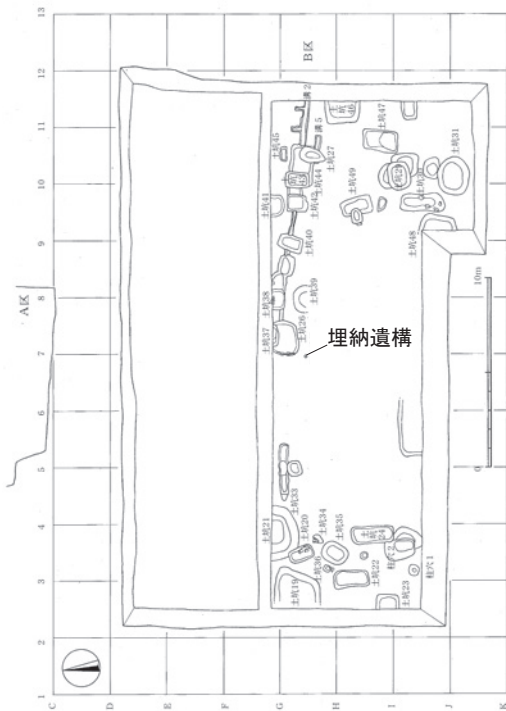
存在したという仮説を提示した（北條芳隆 2006b）。

舟入状遺構の発見 第15次調査（工学部電気電子棟地点）で発見された素掘り舟入状遺構、石組み舟入状遺構の発見もまた、屋敷境溝の調査と並んで重要である（定森編 2005）（第5図）。現在の工学部付近は「安宅島」と呼ばれ、『徳島藩領国図屏風』や『忠英様御代御山下画図』（推定寛永年間、国文学研究資料館史料館蔵）などに描かれた徳島藩の船置所があったと推定される（第6図）。17世紀前半から中頃の素掘り舟入状遺構は、この船置所に所在した船着場と考えられている。この船置所は、助任川の堆積が厚くなり、船の航行に支障が出始めたため、福島安宅へと移設されることとなった（根津 2005）。初期船置所の移設後、旧安宅島は宅地化され、民澤家の屋敷地となる。このことは『阿波国徳島城之図』（1646年、個人蔵）で確認される。この地点を調査した定森秀夫は、17世紀後半から18世紀の石組み舟入状遺構は、絵図には描かれていないものの、初期船置所の施設を再利用して、屋敷地内に舟入を造り、私的な水運を行ったものとみている（定森 2005）。文献史学の立場から、安宅の移転時期の諸説を検討した根津寿夫は、1641（寛永18）～1642（寛永19）年を有力な時期とみなし、さらにこの移転を一国一城令発令後の、国内の動きと連動した城下町再編のなかに位置づけた（根津 2005）。

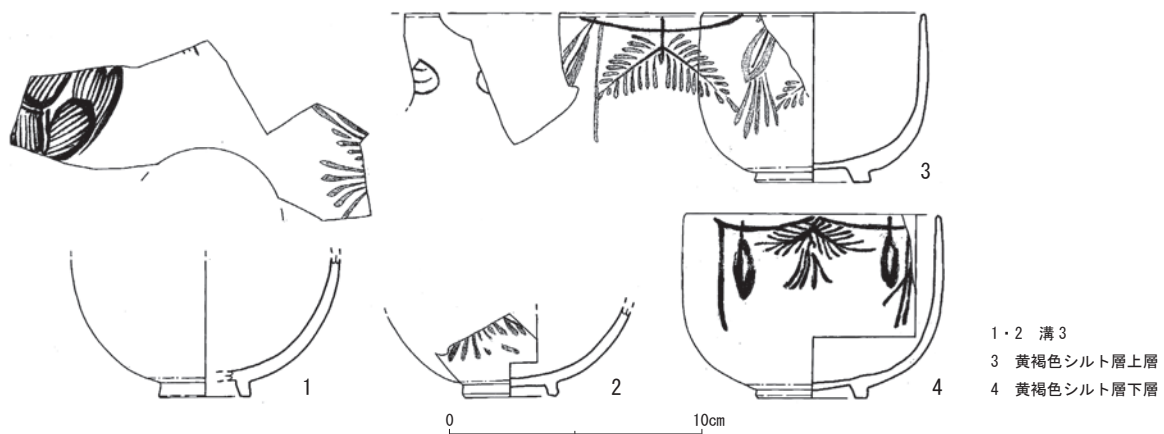
扁球形青銅製品埋納遺構の発見 第2次調査（地域共同研究センター地点）では、小規模な土坑内



第6図 『徳島藩領国図屏風』安宅島部分拡大



第7図 地域共同研究センター棟地点の埋納遺構と出土遺物
北條・定森編(2006)より引用・改変。



第8図 地域共同研究センター棟地点出土のしめなわ文茶碗

1～3：色絵 4：鉄絵 北條・定森編（2006）より引用・改変。

に完形の陶器の火入れを埋納し、その中に扁球形を呈する青銅製品を納めたうえ、この青銅製品と火入れを砂で埋めた状態の遺構が発見された（北條・定森編 2006）（第7図）。この遺構については、北條芳隆と定森秀夫の二人によって、解釈が示されている。

北條は、遺構の所属時期は幕末ごろとみたうえ、地鎮祭の遺構として一般的に認知されているものとは異なるものの、呪的な性格を帯びたものと考えた。そして、遺構の位置関係をみて、埋納が建物の縁に沿う場所を選んだ可能性を指摘した（北條・安山 2006）。

定森は、青銅製品に彫り込まれた八卦に、「家内安全」などの吉ないし善意の意図を読み取り、北條の示した解釈に加え、当地を拝領した佐野家で、家内安全などを祈願して家の周辺部に青銅製品が埋納されたという解釈も示した（定森 2006）。

しめなわ文茶碗をめぐる議論 今日、徳島城下町遺跡を代表する遺物の一つに数えられるしめなわ文茶碗の発見は、常三島遺跡第2次調査（地域共同研究センター棟地点）を契機とする（北條・定森編 2006）（第8図）。しめなわ文茶碗の研究は、この調査に関わった北條ゆうこによって先鞭がつけられた。

北條は、徳島県内の出土例を施文技法によって、色絵・鉄絵・鉄絵＋染付・鉄絵＋色絵の4つに分類し、そのうち、色絵資料については編年案を提示した。そして、民俗記録や文献史料の検討によって、しめなわ文茶碗が正月のオオブクチャ行事に使用される碗であり、阿波の藩主がオオブクチャを飲み、しめなわ文様をもつ「大福茶碗」を使用していたことを突き止めた。また徳島藩の藩士宅でも、正月にオオブクチャを飲んでいたことを文献史料で確かめ、屋敷跡から多数出土するしめなわ文茶碗をそれに用いたものと捉えた。さらに、しめなわ文茶碗の変遷過程と聞き取り調査で得られた伝承をもとに、徳島藩では年頭礼の際に、しめなわ文茶碗でオオブクチャを藩士達に振る舞い、その茶碗を引き出物のように与えていたという仮説を提示した。そして、しめなわ文茶碗の動向と徳島藩の動向とを次のように対応させた。すなわち、18世紀後半の数量の増加、分布の拡大、文様の定型化などの変化を10代藩主重喜の藩政改革の時期に、19世紀前半の需要・供給安定期を11代藩主治昭の改革推進期に、19世紀後半の規格品の粗悪化が進む供給側の混乱期を天保以降から幕末期の藩制弱体化期

に、という具合である。また、こうしたオオブクチャ行事は、君主と家臣の間の連帯意識を強固なものにする装置として期待された儀礼であり、オオブクチャワンはそのシンボルであったのではないかと考えた（北條ゆうこ 1998）。

続いて日下正剛は、新蔵町1丁目遺跡出土の陶磁器碗類における京・信楽系陶器、しめなわ文茶碗の比率を検討した。この結果、明らかとなったしめなわ文茶碗の高い比率から、この碗を決して希少性のある特殊器種ではなく、量産品ともいべきものとみなした。また、しめな

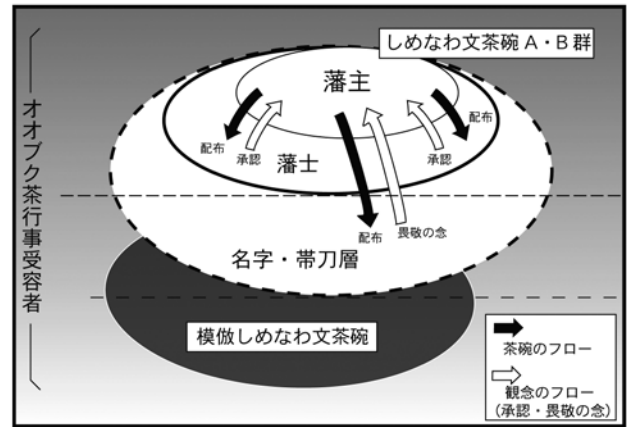
わ文茶碗の器形を10種類に分類し、さらに他の京・信楽系丸碗をも分類し、比較することによって、両者に共通する器形の有無を検討した。その結果、認められたしめなわ文茶碗としてしかみられないタイプは、18世紀後半以降に徳島向け特注品として製作されたものである可能性を考え、このことが生産地の京都から周辺の信楽などへの移動・拡散という問題とも対応するとした（日下 2000）。

その後、しめなわ文茶碗の再検討を行った北條は、近世の徳島藩では正月儀礼などの場で、オオブクチャワンが藩士へ下賜されていたことを、文献史料で確かめた。そして、北條ゆうこ（1998）とは異なり、A群（鉄絵+呉須、鉄絵）とB群（色絵）とに大別し、文様構成によって細別する分類案を提示し、器形とともに変遷を示した。そのうえで、系統差と生産地の問題にも言及し、しめなわ文茶碗の生産体制が京都から信楽へとシフトしたと考えた（北條ゆうこ 2001）。

続いて北條は、徳島県内出土資料の集成を再度行ったうえで、北條ゆうこ（2001）と同じく、文様による分類の修正案を提示し、それと器形との関係を検討した。そして、大別分類のA群（鉄絵、呉須による施文）とB群（色絵による施文）を系譜の違いととらえ、18世紀半ばに京都において生産が始まった双方の系譜が、18世紀後半には信楽でも生産が開始され、18世紀末以降に徳島藩の市場では信楽産が独占するまでになり、以後19世紀半ばまでその体制が継続するという過程を示した（北條ゆうこ 2002）。

以上の北條ゆうこ、日下正剛の研究成果を受けた北條芳隆は、しめなわ文茶碗の歴史的評価を以下のように総括した。

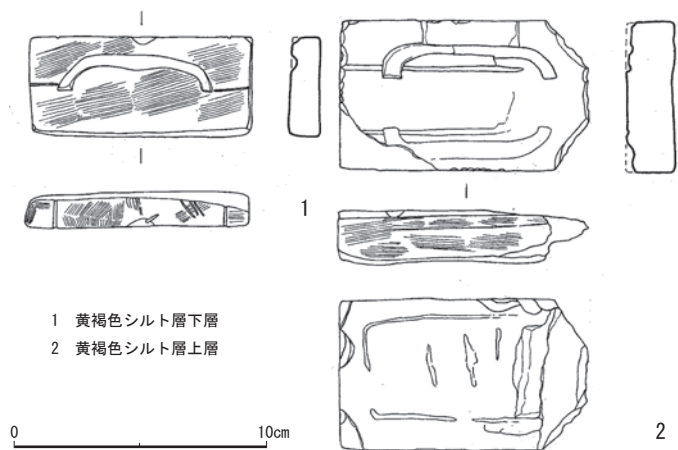
- ・しめなわ文茶碗は、徳島藩における藩主在藩の年の正月年頭礼時に、藩主が藩士に振舞うためにあつらえられた特製茶碗である。
- ・それは隔年ごとに初期には京焼窯元へ、後期には信楽焼窯元へと特注され一括入手された。
- ・年頭礼のために登城し、藩主お目見えを果たした藩士達は、一連の行事の終了後、賜り物の一つとして茶碗を各自の居宅に持ち帰った。こうした行為は、18世紀以降から幕末期まで隔年ごとに繰り返されたので、徳島藩士の各屋敷地には多量のしめなわ文茶碗が蓄積されることとなった。
- ・しかし、個々の茶碗の使用期間は、藩主在藩の次の年頭礼を超えることはなく、常に新規の賜り物によって刷新され続ける性格のものであった。



第9図 しめなわ文茶碗をめぐる威信財交換モデル
北條（2006）より引用。

・こうした年頭行事を考案したのは、文化人としても著名で、京文化への憧憬が強かったとされる10代藩主蜂須賀重喜であった可能性が高い。

こうした評価にもとづいて、北條は藩主と藩士との間で成立した「威信財交換」を媒介・表象する物品として、しめなわ文茶碗を位置づけた。そして、藩士層および名字帯刀を許された町人層、それ以外の町人層といった徳島城との距離感や藩政下での格差が、城下に居住する人々の間で、しめなわ文茶碗を介して、隔年ごとに再確認され続けたという図式を提示した（北條芳隆 2006a）（第9図）。

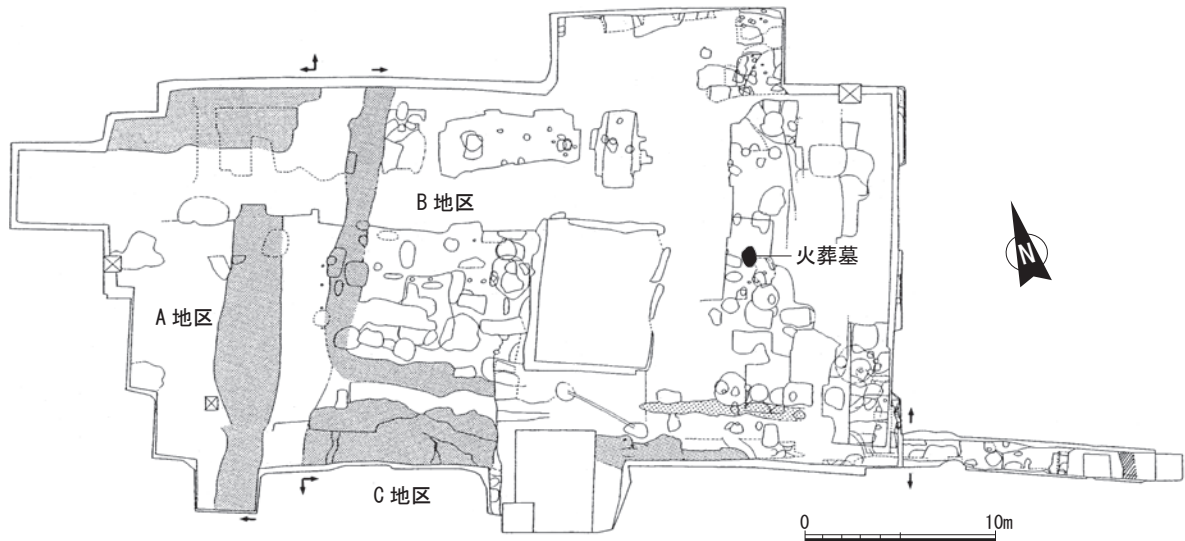


第10図 地域共同研究センター棟地点出土の投網用錘鑄型
北條・定森編（2006）より引用・改変。

投網用錘鑄型の意味するもの 地域共同研究センター棟地点では、投網用の鉛製錘「イワ」の鑄型が2点出土した（北條・定森編 2006）（第10図）。同地点を調査した北條芳隆は、こうした漁具が武家屋敷から出土することの背景として、1) 余暇利用の一形態ないし余技、2) 補助食料の獲得といった二つの可能性をあげた。このうちの2) のケースは、網漁を規制する文献記録（安永6〔1777〕年～寛政年間）からも、その存在がうかがえるとした。そして、初期の規制範囲がのちに徳島城下近辺まで徐々に縮小され、かつ当初、許されていた投網漁が最終的には規制対象に加えられた背景に、18世紀後半の徳島藩が、藩士に対する綱紀肅正にそれまで以上に力を入れ始めたことを読み取った。さらに、こうした動向はしめなわ文茶碗の導入と変質化とも密接に関係し、10代藩重喜の藩政改革と廃位（あるいは息子・治昭による改革）とも連動していると考えた（北條芳隆 2006a）。

屋敷地内で発見された火葬墓 第3・5次調査（工学部光応用工学科棟地点）では、17世紀代の火葬墓が屋敷地内より検出された（徳大埋文委・徳大埋文調 1997）（第11図）。最近になって、本調査室では火葬墓とその出土遺物の整理作業を実施し、その結果をもとに、筆者と米元史織は、造墓の背景と火葬墓の系譜について考察した。その結論は、何らかの特別な事情があって（しかも消極的な理由で）、屋敷地内で成年前半・男性の被葬者が火葬されたのではないかということ、仏教でいう「頭北面西」を想起させる埋葬姿勢と火葬のあり方は室町時代からみられる習俗と系譜を同じくする可能性があるということであった（端野・米元 2015）。

以上、常三島遺跡での調査成果とそれに関連した議論を概観した。議論は様々な遺構・遺物を対象とし、幅広い課題に取り組んだものであり、アプローチ法としては、近世遺跡ということもあって、物質資料だけではなく、絵図、文書などの文献史料を積極的に活用した点が特徴といえよう。さらに、議論の範囲は常三島にとどまらず、徳島城下町全体を視野に入れ、藩政の動向との関係にまで及んでいる。こうした研究成果の多くは、発掘調査報告書刊行の過程で得られたものであるが、常三島遺跡の報告書はいまだに未刊行のままとなっているものが多い。今後、これらの報告書を刊行する過程で、研究のさらなる展開が期待できる。そして考古学の立場から、幕藩体制下における近世城下町研究の



第11図 工学部光応用工学科棟地点の火葬墓の位置

徳大埋文委・徳大埋文調（1997）より引用・改変。

貴重なケーススタディを提供できるものと考えられる。

（端野晋平）

文献

- 石尾和仁, 1999a. 徳島城下町の考古学的研究. 史窓 29, 2-22.
- 石尾和仁, 1999b. 屋敷境の二条の溝をめぐって—橋本報告に寄せて—. 徳島城下町通信 創刊号, 7-10.
- 大矢雅彦, 1993. 河川地理学. 古今書房, 東京.
- 勝浦康守, 2000. 徳島城下町遺跡—旧動物園跡発掘調査—. 徳島大学総合科学部歴史学研究室・考古フォーラム蔵本 (編), 四国・淡路の陶磁器—生産と流通 I—. 徳島城下町研究会, 徳島. pp. 179-183.
- 日下正剛, 2000. 新蔵町1丁目遺跡出土の注連縄文茶碗. 日下正剛 (編), 新蔵町1丁目遺跡企業局総合管理事務所 地点II. 徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター, 徳島. pp. 207-218.
- 定森秀夫, 2005. 調査の成果. 定森秀夫 (編), 常三島遺跡1. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 10-59.
- 定森秀夫, 2006. 後記—特殊遺物の解釈を兼ねて—. 北條芳隆・定森秀夫 (編), 常三島遺跡2. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 90-91.
- 定森秀夫編, 2005. 常三島遺跡1. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.
- 徳島県教育委員会, 2006. 徳島県遺跡地図 第2分冊 (地図編). 徳島.
- 徳島大学埋蔵文化財調査委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室, 1997. 徳島市常三島遺跡埋蔵文化財発掘調査実績報告書 工学部光応用工学科棟. 徳島.
- 根津寿夫, 2005. 安宅の移転について. 定森秀夫 (編), 常三島遺跡1. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 60-71.
- 端野晋平・米元史織, 2016. 常三島遺跡の近世火葬墓. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室紀要2, 37-51.
- 橋本達也, 1998. 江戸時代の城下町を発掘で探る. 川と人間. 溪水社, 広島. pp. 278-293.
- 橋本達也, 1999. 徳島城下町の構造. 関西近世考古学研究会・考古フォーラム蔵本 (編), 京焼—消費地出土の様相—. 関西近世考古学研究会・考古フォーラム蔵本, 徳島. pp. 1-18.
- 橋本達也, 2001a. 常三島の「土手」. 四国徳島城下町通信 6, 14-16.

橋本達也, 2001b. 常三島の「竹垣」. 四国徳島城下町通信 8, 9-11.

平井松午, 1995. 城下町起源の都市徳島. 寺戸恒夫(編), 徳島の地理. 徳島地理学会, 徳島. pp. 179-181.

北條ゆうこ, 1998. 近世阿波のしめなわ文茶碗. 徳島県立博物館研究報告 8, 67-93.

北條ゆうこ, 2001. 徳島出土のしめなわ文茶碗. 関西陶磁史研究会(編), 近世信楽焼をめぐって. 関西陶磁史研究会, 京都. pp. 174-182.

北條ゆうこ, 2002. しめなわ文茶碗再考. 徳島考古学論集刊行会(編), 論集徳島の考古学. 徳島考古学論集刊行会, 徳島. pp. 765-779.

北條芳隆, 2001. 土手や松は過大評価できない. 四国徳島城下町通信 7, 1-5.

北條芳隆, 2006a. 総括. 北條芳隆・定森秀夫(編), 常三島遺跡2. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 79-89.

北條芳隆, 2006b. 徳島城下町の屋敷境1ー常三島地区ー. 四国城下町研究会(編), 近世の屋敷境とその周辺. 四国城下町研究会, 徳島. pp. 9-15.

北條芳隆・定森秀夫編, 2006. 常三島遺跡2. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島.

北條芳隆・安山かおり, 2006. 地域共同研究センター地点の調査成果. 北條芳隆・定森秀夫(編), 常三島遺跡2. 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室, 徳島. pp. 30-78.